醍醐寺蔵探要法花験記における動詞の使用について

――出典からの改変の問題をめぐって――

磯貝淳一

目次

はじめに
一、動詞の改変――二字熟字から単字へ――
二、二字熟字動詞及び単字動詞の性格
三、和化漢文資料における二字熟字動詞の使用
むすび

醍醐寺蔵探要法花験記は、先行の説話に材を取り編纂された法華経霊験譚の集成である。その構成は日本と中国の説話がほぼ交互に排列される形となっている。(1) 出典は、概ね日本の部が本朝法華験記(大日本国法華経験記)、中国の部が法華経伝記から採用されたものとされる。(2) 本書編纂に際しての出典の引用態度は、編者による改変・添加・削除と思しき部分は見られるものの、探要法花験記本文と出典と目される資料の本文とがほぼ同文と見なされる説話が多く存することが分かる。(3) 以下、一話分の両本文を対照し示す。(4)

探要法花験記・巻上・第九話　　法華経伝記・巻第十・第十七話

九　　无行比丘十七

天竺有一比丘名曰无行恒修法供養也所謂佛所説薩達摩芬陀利迦　　昔外國有一比丘名无行恒修法供養所謂佛所説薩達摩芬陀利迦

等修多羅一切世間難信難解難受難釋能信能解受持讀誦以
方便力爲諸衆生分別解說顯示分明守護法藏是名法供養
能修此供養時十方諸佛如星而見異口同音而說偈言
寶滿三千大千界供養十方諸如來不如法花一句偈受持讀誦得成佛
假使遍滿大千界斷一切善毛道生若聞法花一句偈功德薫心速成佛云々

修多羅一切世間難信難解難受難見能信能解受持讀誦以
方便力爲諸衆生分別解說顯示分明守護法藏是名法之供養
能修此供養時十方諸佛如星而見異口同聲而說偈言
寶滿三千大千界供養十方諸如來不如法花一句偈受持讀誦得成佛
假使遍滿大千界斷一切善毛道生若聞法花一句偈功德薫心速成佛
无行比丘聞佛說偈深入無生法忍是爲法供養益出覺禪師記

さて、このように出典の中国漢文とそれに基づいた和化漢文という関係上、両本文は近似していると認められる。このため、探要法花験記を和化漢文資料研究に供するに際しては、記述し得た言語事象が、真に和化漢文資料の事象としての性格を有するものであるのか、正格漢文に近似したものであるのか（和化漢文資料の問題と認め得るのか）という点の確認が必要となる。この問題は、正格漢文及び和化漢文資料をより多く検索することによって、当該事象の位置づけを行う検証の作業を通して解決できるものと考える。しかし、探要法花験記が日本と中国それぞれに出典を持つ資料である以上、特に中国出典を基とする部分を和化漢文資料の文章と認め得るのか、また本資料を一つの均質な言語資料として取り扱い得るのかという問題は未解決の状態であると言わざるを得ない。

そこで本稿では、出典から和化漢文へという過程において認められる改変の一端を取り上げ、その性格を明らかにする。このことを通じて、中国に出典を持つ和化漢文資料の「出典の影響下に無い和化漢文資料としての独自性」を探ることとしたい。

一、動詞の改変―二字熟字から単字へ―

先に述べたように、探要法花験記中国の部とその出典たる法華経伝記とは、近似した本文となっている。しかし、尚詳細に観察すると、多くの差異が存していることが分かる。法華経伝記全181話の内、探要法花験記の出典と認められる

42話について両本文の比較を行ったところ、以下に示すような差異が認められた。(5)

添加　409例　　削除　256例　　改変　691例

この内、法華経伝記から探要法花験記への「改変」を概観すると大きく三つに分類される。

Ⅰ用語　574例　　Ⅱ用字　85例　　Ⅲ構文　32例

特に「Ⅰ用語」の改変の内訳は以下に示すようになる。

1同種の品詞に改変　536例

名詞　279例　　指示代名詞　4例　　動詞　209例　　補助動詞　1例　　副詞　18例

接続詞　21例　　助動詞　2例　　助詞　2例

2異なる品詞に改変　38例

名詞→指示代名詞　　副詞→接続詞　等

本稿で問題とするのは、1の内「動詞」の改変である。動詞の改変において最も多く認められるのは、以下に示すように或る動詞が他の類義の動詞に置き換えられるものである。

①即告僧定曰我是毘婆尸如來也（探要法花験記・巻上第11話）

①′常語僧定云我是毘婆尸如來（法華経伝記・巻5第7話）

②後受病而死去經三日蘇息（探・巻上第15話）

②′後遇疾而死經三日蘇起（法・巻3第3話）

③即從師求道師授以提婆品（探・巻上第41話）

③′從師訪道授以提婆品（法・巻6第20話）

この内、法華経伝記では熟字の動詞であるものが、探要法花験記において単字の動詞に改変される例が延べ59例（異な

りは54語）認められる。

④見者歎曰惜哉雲藏輕大乘失二世利矣（探・巻上第35話）

④′見者歎曰惜哉雲藏輕大乘損失二世利矣（法・巻9第20話）

⑤謂師友曰我以誦經力生兜率内院欲値慈氏尊此願可不（探・巻下第5話）

⑤′謂師友言吾以誦經力生兜率内院欲値遇慈氏此願可不（法・巻6第9話）

⑥言訖而卒端坐如生衆葬之収舍利千餘粒（探・巻上第41話）

⑥′言訖而卒端坐如生衆荼毘収舍利千餘粒（法・巻6第20話）

⑦比丘僧室種々供養之昇虚空中（探・巻下第38話）

⑦′比丘僧室種々供養之飛騰虚空中（法・巻9第9話）

④は、法華経伝記において「損失」とされていた動詞が探要法花験記では「失」となっている。同様に⑤「値遇」→「値」、⑥「荼毘」→「葬」、⑦「飛騰」→「昇」とされ、いずれも二字熟字動詞[6]から単字動詞への改変が加えられている。又、改変の形態には、④⑤のように法華経伝記において動詞の表記として使用されている漢字の内いずれか一つを用いて動詞を表記するもの・⑥⑦のように法華経伝記において使用されている漢字とは別の漢字を用いて動詞を表記するものの二種が認められる。これらの改変の全例を以下に掲げる。（算用数字は複数例の用例数、法華経伝記・探要法花験記の順に例を掲げた）

これらの例は総て、二字熟字動詞（法華経伝記）から単字動詞（探要法花験記）へという改変である。一方これとは反対に、単字動詞（法華経伝記）から二字熟字動詞（探要法花験記）へという改変を行う例が存する。

⑧後受病而死去經三日蘇息（探・巻上第15話）

⑧′後遇疾而死經三日蘇起（法・巻3第3話）

⑨誦法花普賢乘象而來授句逗天童潛來給仕矣（探・巻上第30話）

⑨′誦法花經普賢乘象而來授句逗天童潛來侍（法・巻3第8話之13）

「死・死去」「侍・給仕」「決・決定」「迎・来迎」「恐・怖畏」「落・穿落」の6例の改変が認められる。

以上、単字動詞（法華経伝記）から二字熟字動詞（探要法花験記）への改変は、二字熟字動詞（法華経伝記）から単字動詞（探要法花験記）への改変に比して例（ヴァリエーション）が少ないことが分かる。

厭惡・惡	願樂・願	欣求・望	趣向・到	損失・失	吐咽・吐	暴死・死
應受・受2	祈誦・誦	辭去・去	誦通・誦2	荼毘・葬	頓成・變	摩觸・觸
往尋・卽	祈請・祈	止宿・宿2	常住・住	値遇・値	發顯・受	夢見・夢
覺愈・愈	恐怖・恐	就加・增	食飡・食	致死・死	飛騰・昇	來下・下
歇滅・滅	敬重・敬	拾集・拾	隨釋・釋	置収・収	殯葬・葬	來下・來
還下・還2	經歷・經2	聚集・集	推問・問	低垂・低	諷誦・誦	来到・來
感見・見	幸願・願	収置・置	栖息・栖	適到・到	變作・化	
還投・還	枯朽・朽	酬答・答	生在・生	傳持・持	變作・變	

二、二字熟字動詞及び単字動詞の性格

ここまでの検討から、法華経伝記から探要法花験記の文章が成立する過程において、二字熟字動詞が単字動詞に改変される場合があることが明らかとなった。続いて、これら動詞の性格について、改変が行われる動詞とそれが行われな

い動詞との比較を通じて考える。

探要法花験記には法華経伝記において使用される二字熟字動詞を改変することなく受け継ぐ例が見られる。以下にその全例を掲げる。（算用数字は複数例の用例数）

愛樂　安慰2　安置　移居　囲繞2　囲遶　廻向　往詣　往生2　悔過　悔悟　開講　解説2　學通　加責　呵責
合掌3　還活　感喜　歡喜6　寒心　勸他　感動　起居　寄在　歸命2　究竟　休息　供給　悅驚　恭敬2　行言
行道　驚怖　虚説　勤誦　吟誦　苦行2　供養8　敬異　輕賤　啓聞　懈怠　結縁　結跏2　決定　顯示　見聞2
講宜　交語　交集　講説3　交通　降臨　護持　勤行2　鎖盡　坐禪2　殺害　参候　自解　自稱　臭穢　充滿
呪願3　修行　誦經　守護2　受持5　誦持3　誦通2　出家11　誦得2　稱記　稱計　燒香　淨修　疏出　燒身
消盡　精進2　燒盡　精誠　稱歎　稱佛　成佛　稱名　消滅　書寫3　瞋恚　信受　盡燒　隨喜　請益　精懃　專
行　專心　穿落　唼食　卽來　卽許　存念　墮在　端坐3　耽嗜　彈指　誕生　嘆息　値遇　惆悵　跳踏　長跪
傳聞　讀誦4　得樂　入道　剝爛　破烈　反縛　犯用　悲喜2　悲泣2　悲哭　秘収　悲涕2　肥滿　飛來　覆育
腹行　趺坐　諷誦5　聞知2　分別2　分明　芬烈　平復　遍滿　編錄　奉事　奉施　暴卒　發願6　發心　奔走
滿足　眠臥　鳴吼　命終4　明詔　沐浴　遊戲　遊行2　來會　來迎4　來至　離苦　輪轉　流轉　練擣　戀慕2
老弊

延べ239例（異なり161語）である。これらの語と先の探要法花験記において改変が認められた法華経伝記の語とを比較すると、重なるのは「誦通」「値遇」「諷誦」の三語のみである。このことから、法華経伝記から探要法花験記へ改変がなされた二字熟字動詞は、改変されなかったものと重なることは殆ど無いことが分かる。ここで、改変が行われた二字熟

字動詞がどのような性格を有するのかを考えてみたい。

まず、これらの動詞には「類義の漢字が熟合して成立するもの」が多く存することが注目される。

①經歴三年精勤諷誦未曾暫廢（法華経伝記・巻5第14話）

②已過七日還活於塚間悲泣投身大地親友來問敢不酬答（同・巻9第9話）

③卽還宿室頭病三日方死上心少暖家人厭惡其嫉不殯葬之（同・巻9第22話）

①の例は「經歴」が「（ある一定の期間を）経る」という意の動詞となっている。この語の造語成分である「經」「歴」両字は、例えば黒川本色葉字類抄に

經ヲ歴同郎繫反／經一　暦　邦　控　盛　弦　早　由　逕　踵　更　已上同　（巻中104ウ5）

の如く同一項目に記載が見られることからも分かるように、両字共に「経る」を意味する類義の漢字であると認められる。同様に②「酬」「答」は「コタフ」（前田本色葉字類抄・巻下5ウ1）の項目に、③「厭」「惡」は「ニクム」（同上・巻上37ウ4）の項目に記載が認められる。このような関係において捉えられる動詞は、

厭惡・應受・覺愈・歇滅・願樂・祈請・恐怖・經歴・幸願・辭去・止宿・聚集・酬答・食飡・推問・損失・値遇・低垂・發顯・諷誦

等がある。このような動詞について森野繁夫氏は、中国六朝期の文章にそれまでには見られない新しい語彙・語法が見られることを指摘し、「六朝期の複合動詞は、類似した意義・機能を持つ二字を複合したものがほとんどである」と述べている。(8) 探要法花験記の出典たる法華経伝記が、六朝期に成立した史伝体の流れを汲む文章であることを考え合わせると、ここで問題としている二字熟字動詞は、中国六朝期の文章（史伝・古小説・正史・訳経等）に影響を受けた語彙である可能性が指摘できよう。(9)

先の考察と考え合わせると、探要法花験記では出典たる法華経伝記の動詞の中でも、六朝期（もしくは唐代）成立にか

かる類義の複合動詞を避け、単字の動詞を採用するという改変の態度が認められることが分かる。

続いて、これらの熟字動詞が探要法花験記においてどのような動詞へと改変されているかを確認する。先に取り上げた「改変された動詞」に対する探要法花験記の動詞の使用を纏めた結果を以下に掲げる。各動詞について、色葉字類抄における当該表記の掲出順位を項目数と共に示した。（「合」は当該漢字に合点が付されることを示す、「＊」は醍醐寺蔵探要法花験記の加点例から漢語サ変動詞と認められるものを示す）[10]

二字熟字動詞	単字動詞	色葉掲出	二字熟字動詞	単字動詞	色葉掲出
厭惡	惡	ニクム 1／15	祈請	祈	イノル 1／9
應受	受	ウク 1／30	恐怖	恐	オソル 2／51
往尋	卽		敬重	敬	ウヤマフ 1／11
覺愈	愈	イユ 1／9	經歷	經	フ 1／12
歇滅	滅	＊	食飡	食	クフ 1／25
還下	還	カヘル 2／23	隨釋	釋	
感見	見	ミル 1／55	推問	問	トフ 1／11
還投	還	カヘル 2／23	栖息	栖	スム 3合／12
願樂	願	ネガフ 1／38	生在	生	ウマル 1／3
祇誦	誦	＊	損失	失	ウシナフ 1／15

二字熟字動詞	単字動詞	色葉掲出
荼毘	葬	アフ　5合／46
値遇	値	シヌ　1／23
致死	死	オサム　1／78
置収	収	タル　1／16
低垂	低	イタル4合／74
適到	到	*
傳持	持	ハク　1／7
吐咽	吐	ネガフ　1／38
幸願	願	クツ　1／3
枯朽	朽	ノゾム　1／15
欣求	望	サル　1／33
辭去	去	ヤドル　1／18
止宿	宿	マス　1／29
就加	増	ヒロフ　1／9
拾集	拾	アツム　1／71
聚集	集	オク　1／34
収置	置	

二字熟字動詞	単字動詞	色葉掲出
酬答	答	コタフ　1／6
趣向	到	イタル4合／74
誦通	誦	*
常住	住	スム　1／12
頓成	變	
發顯	受	ウク　1／30
飛騰	昇	ノボル　2／27
殯葬	葬	
諷誦	誦	*
變作	化	
變作	變	
暴死	死	シヌ　1／23
摩觸	觸、夢	フル　1／8
夢見	夢	
來下	下	クダル　1／19
來下	來	キタル　1／10
來到	來	キタル　1／10

以上の検討から看取されるのは、探要法花験記使用の動詞はその殆どが、色葉字類抄当該項目において最上位掲出かもしくは合点付き漢字によって表記されるという点である。このことから、探要法花験記では、出典に改変を加えるに際して、当該和訓に定着の度合いの高い漢字を使用する傾向が存することが分かる。(11)

三、和化漢文資料における二字熟字動詞の使用

それでは斯かる動詞の使用傾向は、和化漢文資料において一般的な事象なのであろうか。この点について、中国に直接の出典を持たない資料を中心に確認[12]を行うこととする。対象とするのは、日本往生極楽記・大日本国法華経験記・注好選・雲州往来・御堂関白記・高山寺本古往来である。この六資料について、先に探要法花験記において帰納した「改変された動詞」の調査を行った。結果を以下の表に示す。54語の熟字の中、使用が認められるのは以下に示す語である。

日本往生極楽記（日往）	敬重・荼毘・諷誦
大日本国法華経験記（大日）	祈請・恐怖・敬重・常住・食飡・値遇・欣求・止宿・聚集・趣向・諷誦・變作・來下・來到
注好選（注好）	収置・夢見
雲州往来（雲州）	ナシ
高山寺本古往来（高山）	損失
御堂関白記（御堂）	還下・諷誦

大日本国法華経験記に14語の使用を見る以外は、2～3語の使用とその数は多いとは言えない。比較に際しては表現する内容(動詞)そのものの有無が分かるように、類義の単字動詞も併せて調査した。以上のことから、日本往生極楽記・注好選・雲州往来・高山寺本古往来・御堂関白記では探要法花験記と同様、二字熟字動詞の使用が避けられ、単字動詞が使用される傾向にあることが分かる。それでは、和化漢文資料において二字熟字動詞が使用されるのはどのような理由によるのであろうか。

	日往		大日		注好		雲州		高山		御堂	
	熟語	単字	熟語	単字	熟語	単字	熟語	単字	熟語	単字	熟語	単字
厭惡	—	惡	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
應受	—	受	—	受	—	受	—	受	—	—	—	受
往尋	—	卽	—	行	—	行	—	尋	—	往	—	行
覺愈	—	—	—	愈	—	—	—	—	—	—	—	—
歇滅	—	—	—	滅	—	滅	—	—	—	滅	—	—
還下	—	還	—	還	—	還	—	歸	—	還	○	還
感見	—	見	—	見	—	見	—	見	—	見	—	見
還投	—	還	—	還	—	還	—	歸	—	還	—	還
願樂	—	願	—	願	—	願	—	願	—	—	—	—
祈誦	—	誦	—	誦	—	誦	—	—	—	—	—	—
祈請	—	祈	○	祈	—	祈	—	—	—	祈	—	祈
恐怖	—	恐	○	恐	—	恐	—	恐	—	恐	—	恐
敬重	○	—	○	敬	—	敬	—	—	—	敬	—	—
經歷	—	經	—	經	—	經	—	經	—	經	—	經
幸願	—	願	—	願	—	願	—	願	—	—	—	—
枯朽	—	—	—	朽	—	—	—	—	—	—	—	枯
常住	—	住	○	住	—	住	—	栖	—	—	—	住
食飡	—	食	○	食	—	食	—	—	—	—	—	食
隨釋	—	—	—	釋	—	—	—	—	—	—	—	—
推問	—	問	—	問	—	問	—	問	—	問	—	問
栖息	—	栖	—	栖	—	—	—	栖	—	—	—	—
生在	—	生	—	生	—	生	—	—	—	—	—	—
損失	—	失	—	失	—	失	—	失	○	—	—	—
荼毘	○	葬	—	葬	—	葬	—	—	—	—	—	—
値遇	—	値	○	値	—	値	—	逢	—	逢	—	—
致死	—	死	—	死	—	死	—	死	—	—	—	死
置収	—	収	—	収	—	収	—	—	—	—	—	—
低垂	—	—	—	—	—	低	—	垂	—	垂	—	垂
適到	—	到	—	到	—	到	—	到	—	到	—	到
吐咽	—	吐	—	吐	—	吐	—	吐	—	—	—	—
頓成	—	變	—	變	—	變	—	—	—	變	—	—
發顯	—	受	—	受	—	受	—	受	—	—	—	受
欣求	—	望	○	望	—	望	—	望	—	望	—	望
辭去	—	去	—	去	—	去	—	去	—	去	—	—
止宿	—	宿	○	止	—	宿	—	—	—	—	—	宿
就加	—	—	—	增	—	增	—	增	—	増	—	—
拾集	—	—	—	拾	—	—	—	聚	—	—	—	—
聚集	—	集	○	—	—	—	—	—	—	—	—	—
収置	—	置	—	置	○	置	—	—	—	—	—	置
酬答	—	答	—	答	—	答	—	答	—	—	—	答
趣向	—	到	○	到	—	到	—	到	—	到	—	到
誦通	—	誦	—	誦	—	誦	—	—	—	—	—	—
飛騰	—	—	—	昇	—	昇	—	昇	—	—	—	昇
殯葬	—	葬	—	葬	—	葬	—	—	—	—	—	—
諷誦	○	誦	○	誦	—	誦	—	—	—	—	○	—
變作	—	變	○	變	—	變	—	—	—	變	—	—
暴死	—	死	—	死	—	死	—	死	—	—	—	死
摩觸	—	—	—13	觸	—	觸	—	觸	—	觸	—	—
夢見	—	夢	—	—	○	—	—	—	—	—	—	—
來下	—	來	○	來	—	來	—	來	—	來	—	來
来到	—	來	○	來	—	來	—	來	—	來	—	來

ここで、和化漢文資料中、二字熟字動詞の使用が目立つ大日本国法華経験記について確認を行うこととする。本資料の文章は、以下に示すように対句的な表現を多用し、字句の数を調えようとする傾向がある。[14]

①比丘驚夢入比良山（8字）、經歷數明推尋覓求（8字）、遙聞讀誦大乘音聲（8字）、（巻上第18話）

②告衆人言、我以此指（4字）、磨觸女人（4字）、作繫念罪（4字）、（巻中第41話）

これは、中国漢文の駢儷文への指向性を窺わせるものである。これに対して、二字熟字動詞の使用を避ける傾向があった探要法花験記は、本資料ほどは字句の数を意識してはいないと考えられる。①②の例文を含む大日本国法華経験記の説話は、探要法花験記の出典と認められるものである。そこで、探要法花験記にその同文箇所を見ると、

③比丘夢驚入比良山（8字）歷數日尋求間（6字）遙聞讀誦大乘聲（7字）（上19オ11）

④卽告衆人曰 我以此指（4字）觸女人（3字）作繫念罪（4字）（上14ウ6）

大日本国法華経験記では、字句の数を調えた表現であったところが、探要法花験記では、これが崩れていることが分かる。また、これらの例において、①「經歷」の二字熟字動詞が③「歷」の単字動詞に、同様に②「磨觸」が④「觸」に改変され、字句数の変化と動詞の改変とが相関性を持つことが伺える。

さて、探要法花験記において、例えば「値」と「値遇」との関係を見ると、

値	対句[15] ナシ	非対句	5例
値遇	対句	2例	非対句 1例

のように、非対句表現では単字動詞の「値」を使用し、対句的表現もしくは偈において二字熟字動詞「値遇」を使用する傾向があることが分かる。[16]

⑤身諸毛孔出梅檀香口中常出優鉢羅花香最後値佛得阿羅漢（非対句・上5ウ3）

⑥今値沙門早還本國傳法弘通授多法文矣（非対句・上8ウ7）

⑦更无間斷一生讀誦法花經萬餘部値遇法花講一千餘度　（対句[17]・下21ウ6）

⑧而説偈曰釋迦如來避世遠　流轉妙法値遇難　雖値解義亦爲難　雖解講宣最爲難（偈・下27オ3）

以上のことから、二字熟字動詞の使用は、対句的表現や字句の数を調える表現を志向する資料において認められることが分かった。更に、この指向性が薄い資料において当該動詞が使用される場合、対句的表現の中で限定的に使用される場合が多いことも明らかとなった。

調査資料を広げて検討を行う必要が存するものの、和化漢文資料では出典の有無に関わらず、類義の二字熟字動詞の使用が少ないこと、またそれが使用される場合は対句的表現や偈等、字数が意識される場合に限られることが指摘できよう。

むすび

以上の検討から、以下のことが明らかとなった。

①探要法花験記はその出典（法華経伝記）で使用される二字熟字動詞の使用を避ける傾向がある。またその二字熟字動詞は、中国六朝の漢文において見出される新しい語形と認められる可能性がある。

②二字熟字動詞の改変は、単字動詞への置き換えが専らであって、その表記には当該和訓に対する定着の度合いが高い漢字が用いられる。

③和化漢文資料では、二字熟字動詞の使用は少ないと考えられる。使用が認められる資料では、対句表現・偈等の字数が意識され、その調整に資すると思しき使用が多く認められる。

④①及び②は、中国に出典を持つ和化漢文資料における和化漢文的要素であると認められる。これらの和化漢文資料は、正格漢文の規範に縛られながらも、日本語の表記様式の一つとして成立していることが分かる。

本稿において行った検討により、探要法花験記の和化漢文資料としての性格の一端を明らかにすることができたと考える。今後更に対象とする事象を広げ、本資料の和化漢文資料中における位置づけや正格漢文との相関性をより明確にすることとしたい。(18)

注

(1) 本稿では、日本撰述の資料を出典に持つ説話群を「日本の部」、中国撰述の資料を出典に持つ説話群を「中国の部」と仮称する。

(2) 『醍醐寺蔵探要法花験記』(馬渕和夫編、一九八五年)解説による。

(3) 東大寺図書館蔵法華經傳記(五帖、大治五年写)について調査を行った。探要法花験記中国の部説話が、法華経伝記東大寺本の系統に近い本文を引用していることは、注2書解説に指摘がある。

(4) 上段に探要法花験記を下段に法華経伝記を配した。行取りは探要法花験記に従い、法華経伝記のそれを改めた。

(5) 両本文の異なりを、法華経伝記に対する探要法花験記の変化として次のように分類した。

添加　法華経伝記に存しない語・文が探要法花験記に存する場合

例　七歳誦普門品→生年七歳始誦普門品(法華経伝記・巻2第8話/探要法花験記・巻上第3話)

削除　法華経伝記に存する語・文が探要法花験記に存しない場合

例　聽徒中或夢瓦官‖是三變淨土分身在於八方→聽徒中或夢是三變淨土分身在於八方(同右)

改変　法華経伝記の同一文脈にある探要法花験記の語・文が他の語・文に置き換えられている場合、又は構文上の異なりが存する場合

例　著一偈云→著一偈曰‖(用字の差異)(法・巻3第4話/探・巻上第5話)

例　出都憩‖竹林寺→出都住‖竹林寺(用語の差異)(法・巻10第2話/探・巻上第17話)

例　皆解念佛多生淨土也→皆解念佛生淨土多‖(構文の差異)(法・巻5第10話/探・巻上第13話)

(6) 法華経伝記において使用される動詞を「二字熟字」と認めるには、客観的に熟合の度合いを確かめる必要がある。特に合符等の加点例が参考になると考えられるが、東大寺図書館蔵本にはこれら動詞に対する加点例が極めて少ない。今後、他資料を参照して蓋然性を高める必要がある。

(7) 本考察では、とりあえず動詞の音読・訓読の別は問わないこととする。

(8) 森野繁夫「六朝漢語の研究――「高僧伝」について――」(広島大学文学部紀要三八、一九七八年一二月)

(9) 法華経伝記自体は唐代の成立である。しかし、文章のスタイルは六朝記史伝体の影響を受けているものと考えられる。

(10) 空欄は色葉字類抄において漢字と訓との結び付きが確認できなかったものである。これらの中には、漢字と訓との結び付きが通常稀薄であると考えられるものや、漢語サ変動詞として使用されるものが含まれると考えられる。

(11) 峯岸明「平安時代における漢字の定訓について」(『横浜国大国語研究』二、一九八四年三月)

(12) 注好選は、中国に出典を持つ資料である。比較のために調査を行った。

(13) 「磨觸」の例あり。

(14) 小山登久氏は、公家日記に見られる「連続・反復して使用される対偶をなさない一定の句」を「定句」と称している。(「定句」(『平安時代公家日記の国語学的研究』第四章第一節二、一九九六年五月)

(15) ここで言う対句は、厳密に対句表現となるもの以外に、字句の数を調えるだけのものも含む。

(16) 小山登久「連文」(『平安時代公家日記の国語学的研究』第一章第一節五、一九九六年五月)に、古記録から平安時代の公家日記に至るまでの「連文」表現を調査し、特に公家日記においては「記録体という枠の中でではあるが、「漢」の世界を志向する記主達の姿勢のほのかな投影を見ることができる」との指摘がある。

(17) 厳密には、文字数が合わないが、明らかに対句表現が意識されていると認められる。

(18) 今回は、出典中国漢文との比較を中心に行い、探要法花験記における「日本の部」と「中国の部」との比較の問題を扱うことができなかった。それぞれ日本と中国とに出典を持つことによって生ずる差異が認められるのか否か、本資料の均質性を確認する意味においても、今後両者の比較を行うこととしたい。

［調査資料及び使用テキスト］

○探要法花験記（『醍醐寺蔵探要法花験記』）○法華経伝記（東大寺図書館蔵本）○注好選（『古代説話集注好選《原本影印并釈文》』）○大日本国法華経験記（『大日本国法花経験記校本・索引と研究』）○日本往生極楽記（日本思想大系『往生伝法華験記』）○雲州往来（『雲州往来享禄本研究と総索引』本文研究篇）○高山寺本古往来（高山寺資料叢書第二冊『高山寺本古往来　表白集』）○御堂関白記（『陽明文庫蔵本御堂関白記自筆本総索引』（一））

用例の引用に当たっては、論旨に直接関係しない場合、用例に附された訓点はこれを省略した。また、理解の便に資するため私に読点を補う場合がある。